バーンズ小論（その二）

宇佐美道雄

A Short Paper on Burns (Part 2)

Michio USAMI

This is a continuation of previously issued paper that ended at 2nd chapter. In this part of the paper, three chapters - 'Prosody', 'Subject Matters' and 'Conclusion' - are contained. In 3rd chapter, it is pointed out concerning the peculiarities of Burns' prosody that it has an excessive variety and it is a mixture of the old and the new, the rustic and the refined. In the next chapter, Burns' emotionalism, intercourse with Nature, mysticism, sympathy to the oppressed and antipathy to the oppressors are analysed as the main subjects always shown in his poems. In the last chapter, that distinctive qualities of Burns' poems which have been examined in this paper are totally discussed in relation to the social milieu from which Burns came into existance. After whole realities of 18th century English society are considered, it is concluded that Burns' work concretely embodied the general mentality most prevailing throughout Scotland, Britain and Europe of the age.

§3 詩　型

バーンズの詩型の豊富さについて，あらためて語る必要はない。イングランドとスコットランドの，古今にわたるあの多様な詩型は，バーンズが「韻律のむつかしさを楽しんで，それを克服することにかかりきっていた」(1)かのごとくにみえるし，また「ついには，バーンズが試みなかった，あるいは試みようとしなかった韻律はなくなってしまった」(2)ほどであったのだから。

玉石混淆ともいうべき，あの幾種類もの詩型の source が現在ではほとんど完全に突き止められて，それがバーンズにたいする plagiarism の批難を生んでいるようにみえるが，いまさらその問題で，バーンズを批判したり，擁護したりしてみても，はじまらないにちがいない。たしかにバーンズは，あれらの prosody を，そのオリジナルからではなくて，新しい Scottish Revival の詩人たちから学んだ— "Cotter's Saturday Night" の spenserian stanza を Spenser からではなくて Beatie から，"The Jolly Beggars" の冒頭を飾る，お気に入りの "Cherrie and Slae" stanza を，古代詩からではなくて Montogomerie から，という具合に。

古いもの，新しいもの，伝統的なもの，地方的なもの，— 無拘束ともみえる prosody の自在な使用を可能ならしめたものが，案外，Masson の "Collection of Prose and Verse" や "The Lark; a collection of Scottish and English Songs"，さらに当時「かごに入れて売り歩かれ，街の屋台に並べられる」(3)ほどよく読まれた "Excellent New Songs" などから得られたものであったとしても，それはそれでかまわない。要するにこれは，Scottish Revival 運動の成熟—古くから伝わるスコットランド的なものを，なんとかしてイングランド的なものに同化させようとする指向が，ようやくその終局を迎えたということを意味しているにすぎない。バーンズがキルマーノック版を出したとき，つまり1786年に至って，それは，初めて Scotch Poem であることを止めて，地方色豊かなイギリスの詩に昇化し得たのである。

バーンズは，Ramsay や Fergusson を手本にするのと全く同じ態度で Spenser, shakespeare, Milton, Pope 等の詩を model にして詩をかくことができた。だからバーンズの韻律を見ていくと，スコットランド的なものの中にイングランド的なものが，イングランド的なものの中にスコットランド的なものが，自在に，そして巧みに混り合って，独特の韻律を形作っているのに気ずく。

The thummart, willcat, brock, an' tod,
Weel kend his voice thro' a' the wood,
He smell' d their ilka hole an' road,
Baith out an' in;
An' Well he lik' d to shed their bluid
An' sell their skin.

"The Twa Herds" の中のこのスタンザなどは，バーンズの作る詩の醍醐味でもあろうが，手なれたバーンズ聯の見事さはしばらおくとして，バーンズの味が滲じみ出してくる大きな要素と思われる4つの行末脚韻に注意を向けてほしい。tod, wood, road, bluid, — Scotch と English が2つずつで，一見したところ English print では rhyming していないようにさえみえるのだが，この素裸の大膳さから，バーンズ独特の土と泥の臭いが漂ってくるのではないか。

だが，無学な農夫の天衣無縫ともみえるこの種の rhyming の中にも，意外に精緻な配慮が払われているのを見落すわけにはいかない。"Scotch Drink" の opening stanza に現われる行末脚韻を例にとると，

Let other poets raise a fracs
'Bout vines and wines an' drucken Bacchus,
An' crabbet names an' stories wrack us,
An' grate our lug;
I sing the juice Scotch bere can mak us
In glass or jug.

rhyme が異常にどぎつく，意味の上でも圧倒的な重みを持つ fracas と mak us が始めと終りをしめくくり，弱くて軽い Bacchus と wrack us がその間にたぐし込んである。そして同様の例は "The Vision" の第二聯にも見ることができる。

Had I to guid advice but harket,
I might, by this, hae led a market,
Or strutted in a bank and clarket
My cash-account;
While here, half-mad, half-fed, half-sarket,
Is a' th' amount.

harket, half-sarket の重さと，market, clarket の軽さを比較してみるならば，ここにバーンズの技巧の秘密の一端をうかがうことは，十分に可能であるだろう。

そのほか，バーンズがその詩作に当って好んで常用する幾種類かのトリックに関して，Hilton Brown が，(1)時おり交える Alexandrine, (2) couplet の中で休止の役割りを果たす triplet, (3)強勢的な繰り返し—,O let me in this ae night, This ae, ae, ae, night' とか, 'O wert thou, Love, but near me!' But near, near, near me! のごとし,(4)日常に使われる地方的な言葉を，生まのまま詩句の中に挿入すること，(5)地方的な固有名詞を，主として音楽的に有効にちりばめること，等を挙げているが，一度バーンズの詩に魅せられた読者には，いちいち思い当るふしの多い指摘といえるのではないか。

バーンズのキルマーノック版は，たちまち600部を売り尽くし，すぐに続いたエジンバラ版も，同じく1500部をまたたく間に売り切ってしまったと伝えられるがこれはたしかに「田舎者の詩集としては驚くべき数字」(4)といわざるを得ない。「キルマーノック版の20ポンドに比して，エジンバラでの出版は総計500ポンドをバーンズにもたらした」(5)ともいわれるが，これは，新風を待ち望むエジンバラ文壇の，その未期的沈滞ぶりを暗示しているものでもあったろうか。当時のエジンバラは「知的中心地としてロンドンに匹敵する観を呈し」(6)ていた。その故にこそ，そこの文人や学者たちは，10音節詩行の行末切れ連句を正格と見なすポープ亜流の古典派的教義の束薄から，一層身動きがとりがたかったことでもあろう。8音節詩行，バラッド型式，歌謡のリズム，地方語の効果，古代詩の再生 — バーンズの prosody が，その詩集の最初の読者に与えたであろう強烈な印象と新鮮な感動は，想像するに難くない。

エジンバラで必要とされたものは，またロンドンにおいて求められているものでもあった。地方的なもの，古きものへの憧れは，イギリス全土にみなぎる風潮でもあったから，エジンバラで巻き起ったあのバーンズ熱というものは，イングランドで見られた Macpherson による "Ossian" の流行や，Percy による "Reliques of Ancient English Poetry" への熱狂と相通ずるものがあったにちがいない。豊富な詩型と多彩な韻律 — バーンズの prosody から打ち出される解放感，野性味，生命力……こそ，あとに続いたイギリス浪漫派運動の巨大なうねりのために，大きな水路を用意したのである。

§4 主　題

Hilon Brown は，バーンズの詩が成功するための二つの条件として，「第一に，主題が胸の底から湧いてきてそれから逃れられないものであること，第二に，主題が身近で，精通したものでなければならないこと」(7)を挙げているが，バーンズの場合には，たしかに詩のテーマと詩人自身との間の密着の度合が強ければ強いほど，作品のアッピールする力が増すという結果をみせている。たしかに「バーンズの詩集を繰れば，あらゆるページから，バーンズ，バーンズ，バーンズが飛び出してくる。彼の作品は，ある意味で肉太の自筆文字にすぎない」(8)といえるようだ。つまりそれは，詩人個人の感情と情熱を表白した抒情詩の世界ということに外ならない。

「いったん激情が燃え上ると，それは，詩となってはけ口を得るまでは，悪魔のようにいきり立つ。しかし，その詩を精読しているうちに，やがてそれは魔法にかかったように鎮まっていく」(9)とは，詩人自身の言葉であるが，こういう種類の詩人にあっては，作品の主題の中にうかがわれる概念的思考や，観念的思惟は，その作品にとって夾雑物としてしか作用せず，悟性的なものの入り込む余地が見出せないほど，情意的なものの濃度が高い場合にのみ，作品世界がその結晶度を高めるというこ

とになるのであろう。この意味においては，バーンズの作品は，「詩は胸の底から生れて，胸の底に達するものだ」(10) というワーズワースの定義にもっとよく適っていることになるだろう。

Gie me ae spark o' nature's fire,
That's a' the learning I desire;
Then tho' I drudge thro' dub and mire
At pleugh or cart,
My muse, though hamelyin attire,
May touch the heart.

"Epistle to J. Lapraik" のスタンザは，「すべて良き詩は，力強き感情の自発的流路なり」(11) とするイギリス浪漫派の宣言に，文学通り直結していることを示しており，そしてそれは，とりも直さず，ルソーの説く個性の尊厳やカントの唱える情意の尊重に，遠く連らなっていることをも意味していよう。バーンズの詩の主題の面における一特色の中にさえも，バーンズを生み出した広大にして肥沃な土壌をうかがうことができるというものではないか。

バーンズは，自己に密着した情意を歌うことに秀でた詩人であったから，彼の優れた詩の中に現われる素材は，スコットランドの農村を決して離れることがなかったし，またそこに歌われる感情は，スコットランドの農民たちのそれ以外であるはずもなかった。それらは，花咲く堤であり，村の居酒屋であり，田舎娘であり，国教会の牧師であり，畑の小ねずみであり，そして野や山に巣喰う妖怪どもであった。そしてそれらは，自然への讃美であり，野性への喜びであり，赤裸々な恋心であり，偽善への憎しみであり，弱きものへの愛情であり，そして素朴な神秘感であった。

Ye flowery banks o' bonnie Doon,
  How can ye blume sae fair?
How can ye chant, ye little birds,
  And I sae fu' o' care?

Thou'll break my heart, thou bonnie bird,
  That sings upon the bough;
Thou minds me o' the happy days,
when my fause luve was true.

ここには，自然と人間のおのずからなる交感がある。遙かなる山河，四季の移り変り，小さな生きものたち，これらはいつの時代にも人の心に郷愁を誘う。そしてそれは，自然にたいする讃美と愛着の念，また驚嘆と神秘の感情となって発現する。

すでにして18世紀の中葉，J. Dyer がグロンガーの丘に立ってその眺望を歌い，J. Thomson が四季折々の風物を詩に書いたとき，それは，18世紀における人間の悟性への過信 — 都会生活と人工的なものへの余りな偏重が，ようやくにして行きずまりをきたしたことを物語った。この傾向が，「自然を師となした」(12) ワーズワースや，「人間よりは自然を愛した」(13) バイロンの地点にまで到達するためには，まだかなりの時日を要したけれども，バーンズの地位を，この大きな流れの中に見定めることは，絶対に間違っていない。

自然と人間との交感は，人間をしばしば自然にたいする神秘感へと導く。従って，バーンズの作品に登場してくる悪魔たちを，人間と自然との間の素朴な交錯関係の一つの現われとして捉えることも，あながち不自然ではないだろう。それにしても，バーンズの妖怪たちには愉快ななやつがばかに多い。アロウェイの廃寺で，真夜中に酒盛りをやっているところをタムに見られた化け物どもは，みんな傑作ぞろいだけれども，

The piper loud and louder blew;
The dancers quick and quicker flew;
They reel'd, they set, they cross'd, they cleekit,
Till ilka carlin swat and reekit,
And coost her duddies to the wark,
And linkit at it in her sark!

こんな愉快な化け物の登場してくる詩が，いったいあるだろうか。

"Adress to the Deil" の中では，魔王がずいぶん突飛ないたずらをするけれども，

Thence mystic knots mak great abuse
On young guidmen, fond, keen, an' crouse;
When the best wark-lume i' the house,
  By cantrip wit,
Is instant made no worth a louse,
  Just at the bit.

人間の助平根性をむき出しにしたような，こんないたずらをする魔王が出てくるからこそ，バーンズの詩は，下品だといって批難されたりすることにもなるのだろう。

スコットランドの自然は，バーンズにとっては，憧れの対象でもなければ，空想を馳る舞台でもなくて，自分自身がその一部をなす，具体的現実そのものであった。だから，あれらの魔物たちが，バーンズにとって，ひな菊や野ねずみや乙女たちと同様，スコットランドの自然と一体になった，極めて親しみの深いものであったことも怪しむに足りない。当時のスコットランドの農民たちにとっては，古くから伝わるこれら魔性のものどもは，依然として日常生活の一部をなしており，その地の詩や歌謡には，すべてなじみ深いものばかりであったが，こんな妖怪どもののさばり歩く詩を読まされたときの，都会の文化人たちの驚きは，どのくらいに強烈なものだったのだろうか。

合理主義と啓蒙思想に支配された18世紀のイギリス思想界にも，その底流として，Böhme や Swedenborg，さらには Taylor などによって表明された神秘主義思想

の存在していたことを忘れるべきではないと思う。これらの思想家の直接的な影響のもとにブレイクの詩が生れたが，さらにそれは，コールリッジの "Christabel"，キーツの "La Belle Dame Sans Merci" となって開花した。19世紀初頭の浪漫主義者たちによって，バーンズの業蹟が讃美されたとき，その背景にこうした潮流の流れていたことを記憶しておくべきではないだろうか。

Cambrige History of English Literature のバーンズ担当者は「粗野な生活になじみ深い点で，バーンズは誰にもひけをとらない。農民生活は完全に彼の領分である，偶々まで知っているし，それは生きた現実である」(14) という。バーンズにとって，スコットランドの自然は，imaginative に存在していたのではなくて，自分を含めた reality としてそこに存在していた。だからバーンズの自然にたいする愛着は，自然と人間との区別が消滅して，自然を形作る個々の具体物の中に，おのれ自身を見るという形をとって発現することが多い。犂に堀り返えされた一本のひな菊にも，バーンズの自然愛は同朋意識となってほとばしり，そこに，虐げられて苦しい農民の生活感情が移入されるのである。

Cauld blew the bitter-biting north
upon thy early humble birth;
Yet cheerfully thou glinted forth
Amid the storm,
Scarce rear'd above the parent-earth
Thy tender form.
The flaunting flow'rs our gardens yield

High shelt'ring woods and wa's maun shield,
But thou, beneath the random bield
O' clod or stane,
Adorns the histie stibble-field,
Unseen, alane.

一人の貧農の自然に寄せる同朋意識は，弱いもの，虐げられるものへの止みがたい愛情となって発露し，「犂で巣ごとねずみを堀り起すとき」(15) にも，

I'm truly sorry man's dominion
Has broken nature's social union,
An' justifies that ill opinion
which makes thee startle
At me, thy poor earth-born companion,
An' fellow-mortal!

となって，"Nature's social union" を破壊するものへの悲しみと憤りに転化する。バーンズのヒューマニズムとか，社会悪への憎しみとかは，このような，貧しい農民の自然に寄せる愛情を母胎として存在し，観念のうえの思想体系として存在しているのではない。

"Holy Willies Prayer" という詩は，何度読んでも面白い。バーンズの詩に思想がないという批難は，止むを得ないにしても，あの調刺詩の面白さは，やはりバーンズのその限界性の故に生れてくるのではないか。主人公は，旧光派に属する実在の牧師である。つまり，この詩の主題の面における，偽善への憎しみとか宗教の堕落とかいう問題は倫理一般として存在しているのではなくて，一人の隣人への日ごろの立腹の感情をもとにして存在しているのである。局限されたリアルな感情というものは，小児病的缺陥を蔵することもあるかわりに，強く人の心に訴えることもある。"Holy Willie's Prayer" に見られる生き生きとした調刺の面白さは，たしかにここにある。だから，バーンズの詩に現われる顕著な正義感は，自然への讃美とか，赤裸々な恋心とか，飲酒の喜びとかいうものと，さして遠いところにあるわけではない。要するにこれは，スコットランドの寒村に生れた一自然児の，その時その時に示す感情のバリエーションにすぎないのである。

そのようなわけで，バーンズの正義感の中に，何らかの思想的統一を求めようと考えても，それは無理というものだろう。ウィリー上人が，天の神に向って，

O Thou, wha in the Heavens dost dwell,
Wha, as it pleases best thysel',
Sends ane to heaven and ten to hell,
A' for thy glory,
And no for ony guid or ill
They've done afore thee!

と祈るのを聞くとき，そこに，詩人自身のある体系を整えた宗教思想 ― カルウィニズムにおける教義上の，あるいは，僧職にたいする宗教的倫理の上の問題を，直接に提起したとしても，結局それは論理のつじつまを合わせる結果にしか終らないだろう。この詩の中から抽出し得るバーンズの倫理思想というものは，つまるところ下層社会に属する農民たちならば，当時だれでも抱いたであろう日常的道徳感の域を越えてはいないのである。

同じ種類のことは，バーンズの詩に見られる倫理感のすべてについて云い得る。だから，バーンズが清貧や誠実を讃え，富裕や権勢を卑しめたからといって，それを余り大げさに捉えるのは考えものというべきである。

Is there, for honest poverty,
That hangs his head, and a' that?
The coward-slave, we pass him by,
We dare be poor for a' that!
For a' that, and a' that,
Our toils obscure, and a' that;
The rank is but the guinea stamp;
The man's the gowd for a' that.

What tho' on hamely fare we dine,
Wear hodden-gray, and a' that;
Gie fools their silks, and knaves their wine,

A man's a man for a' that.
For a' that, and a' that,
Their tinsel show, and a' that;
The honest man, tho' e'er sae poor,
Is King o' man for a' that.

これは，バーンズの倫理感の在り方を示すものとして，すぐに引き合いに出される "For a' that and a' that" の一節であるが，ここから作者の倫理的主張だけを抽出して，それを過大に評価したりするからこそ，バーンズ個人の女性関係のふしだらが，「云い逃れようのない汚点」(16)などに見えることにもなるのだろう。'honest poverty' を説くことは，いつも変らぬ世の常識というものではないか。

こういう観点からいえば，バーンズの中に，Scottish-nationalism とフランス革命の思想とが，平然と同居しているのを見ても，別に不思議がることはあるまい。"Scots wha has" の中で，

By oppression's woes and pains!
By your sons in servile chains!
We will drain our dearest veins,
But they shall be free!

Lay the proud usurpers low!
Tyrants fall in every foe!
Liberty's in every blow!
Let us do or die!

というような勇壮な詩句に出合ったとしても，それはイングランドにたいするスコットランド民族主義とか，自由と平等を標榜する革命思想とかいうような，高遠な理想を表明したものと考える必要はない。Wallace や Bruce は，当時も依然としてスコットランド農民の胸に生きる伝説的英雄だっただけであり，また一方において，権力への反感は，一握りの地主たちに痛めつけられていた当時の農民たちの普遍的感情に外ならなかったのであるから。

従って，バーンズの作品に繰り返えし現われる，虐げられるものへの同情と共鳴，支配階級への不信と反感というテーマは，詩人個人の洞察と思惟が導いた，ある体系的思想の表明などと考えるよりは，18世紀末のイギリス下層民の素朴な日常感覚が，しばしばバーンズの詩の主題になったと考えるべきであろう。バーンズの詩にうかがわれる正義感や倫理的態度は，たしかに「人は生れながら自由であり，そして到るところ拘束を受けている」(17) とするルソーの思想に通じてはいる。しかしこの種の観念を一つの体系と化し，それを思想という形で表明したものは，イギリスではやはり，リー・ハントであり，ウィリアム・ゴドウィンであり，さらにその思想体系を文学的に造型したものは，シェリーであり，バイロンであっただろう。バーンズは，れれらの思想を生み出す母胎となった，当時の一般人の，オリジナルでプリミチブな心的態度を，スコットランド農民の日常生活という，生ま生ましい現場の一点で，的確に捉えたということになるわけである。従って，バーンズの作品におけるヒューマニズムというようなものを考える場合には，詩人個人の側から考察するよりは，詩人を含めた当時の一般人の心的態度の側から，ないしは，そのような心的態度を形成したところの，18世紀イギリス社会全般の趨勢の側から考察することが，一層必要とされるであろう。

§5 結　語

ところで，最初の章に示したごとく，この小論の主たる関心は，文学上の一つの画期的業蹟と，それを生め出した社会的土壌の間の，ある必然の因果関係を明らかにすることに向けられている。バーンズの詩に見られる諸特徴が，Scottish Revival 運動の成熟に負うところ極めて多く，またScottish Revival 運動の基本的性格が，英蘇合同によるスコットランドの飛躍的発展という社会史的契機と密接に関連していることについては，第二章で触れた。従ってここでは，第三，第四の章で指摘した諸特徴を通じて，バーンズの詩が，当時のイギリスのみならず，ヨーロッパ全土にわたる，ある普遍性を持った心的態度を如何に具現しているか，及び，その心的態度を醸成したところの社会史的土壌の実体が，いかなるものであったかを見ておきたいと思う。

文学上の諸現象をも含めてた社会万般にわたる凡ゆる変動の，その根抵的基因を，究極にまで突きつめていったならば，それはやはり，生産諸力の絶えざる増大という契機に到達せざるを得ないだろう。バーンズを生み出した精神的風土というものは，当然のことながら，18世紀後半におけるイギリス社会の，その下部構造の変動によって，根抵を規定さているのである。

バーンズは，借地料をしぼり上げていく「悪差配」(18)に苦しみぬいて，22才のときに，しばらくの間アーヴィンの町の亜麻工場へ働きに出たことがあった。農地が次々と enclose され，少数の大きな土地資本家の所有に帰していく一方で，アーヴィンのような片田舎の町にまで工業資本が進出して，農業労働者を工場に引っぱっていくという現象は，18世紀が終りに近ずくに従って，イギリス全土にまたがって急速に激化した一般的風潮であった。トインビーの「英国産業革命史」は，18世紀後半の約半世紀において，全英国の人口がほとんど2倍近くに増加したこと，また，鉄と石炭の生産高が200倍を越え，木綿，羊毛，穀物等の生産高が，それぞれ飛躍的に増大したことを指摘しているが，これらの事実は，スチーム・エンジン（1764年），紡織機（1764，69，85年）溶鉱炉（1760年），排水ポンプ（1785年），蒸汽船（17

87年），機関車（1814年）等の発明，運河や灌漑用水路の開発，耕作法や農機具の改良等，生産技術の急速な向上と相俟って，当時のイギリス社会の根抵を支える生産諸力 ― 労働力，労働対象，労働手段 ― が，「10年間に過去100年以上の変化を成し遂げた」(19) ことを物語った。そして，この急激な生産力の上昇こそ，スコットランドの片田舎にまで滲透して，バーンズを苦しめることになった経済構造の大規模な変動の究極的要因をなしていたわけである。農業における共有地制から囲込み制へ，工業における自給経済から資本経済へ，畢竟それは，前近代的商業資本主義から，近代的工業資本主義へ，という経済機構上の大変動をもたらしたのである。

経済機構の変動は，当然，社会的及び政治的諸制度の変遷と呼応する。労働問題の発生（貧民救済のスピーナムランド法が1795年に制定され，労働者を抑圧する組合禁止法が1799年に成立した），奴れい貿易の廃止（1772年に奴れい禁止の大審院判決が下り，1791年には禁止法が上程された），文化，教育の滲透（1800年代の初めに，イギリス国内の新聞発行部数は総計1200万部に達した），宗教上の革新（1784年には，それまで事実上教会のなかった土地に，365のメソヂスト礼拝堂が建てられた），自治権の拡大（1772年のジューニアス事件，74年のジョン・ウィルクス事件，78年のジョージ・ゴードン事件等相ついで起った），選挙法の改正（ピットは，指命選挙区を削除する改正案を，1795年に議会に提出した）…… これら一連の社会的事件は，このころのイギリス社会に，資本家と労働者という新しい二つの階級的対立が生じ，要するに，秩序と調和を保った古典的なアンシャン・レジームの世界の崩壊に瀕したことを示した。それはブルジョアジーの質的転換と呼んでも差しつかえないだろう。従来社会的勢力の中心をなし，政治的権力の中枢に位置していた階級の力が衰へて，その下に位いしていた階級が，新らたにその地位への参加を要求してきたのである。「食糧，衣類，燧房の缺除から，ほとんどの場合憔悴し，だらしなく，生気のないのがありありと分った」(20) 父祖たちにくらべて，ほとんど最下層の貧農にさえ属するバーンズが，カーコスワルドの測量学校に入学したり，仕事の暇を見ては，古今にわたる尨大な書物を読破したりしたという事実は，下層階級に蓄積されてきた巨大なエネルギーの一端をうかがわせるものではないだろうか。

そして，社会を擔う階層の変質が，社会一般にわたる精神的風土上の変質と呼応しないはずはない。ではこうした下部構造の変動が，その上部構造にたいして，どのように照応したか。一口に云えば，それは「18世紀合理主義の破産」(21) ででもあろうか。たしかにヒュームの懐疑主義は，18世紀合理主義の滲澹たる破局を示したけれども，しかしそれは，ルソーの浪漫的非合理主義，トマス・リードの常識の哲学，カントの批判主義となって打開の道を見出した。思想界におけるこの動きは，「宇宙は見事な秩序と調和をもって作られた機械的組成を持つ」というポープの世界観から，「万物は絶えず生成発展し，無限の可能性を包蔵する」と考えるルソー自然観への変化のなかに，明確に表現されているではないか。そして，思考形式の上に見られた rationalism から transcendentalism へという動きが，宗教的に示顕しては，deism から pantheism へ，芸術的には，classicism から romanticism へという運動と化し，それによって，18世紀後半における意識構造全般にわたる変動が完成されたのであろう。Arthur Compton-Rickett は，「浪漫主義，フランス革命，カントとヘーゲル，アメリカの独立，これらは，一つの広汎な動きが，いろいろに形を変えて現われた徴候にすぎない」(22) というが，まことに浪漫主義こそは，新しい社会の擔い手ともいうべき新興階級の，若々しいエネルギーの中に根を下ろした，当時もっとも支配的であった心的態度 ― 時代精神といってもよい ― の文学の上に姿を現わしたものということができるのである。

浪漫主義文学の実体をなす特質が何であったかという問題について詳述しているいとまもない。それは，「画一と均斉を排し，自由と変化を求める。知的，統一的ではなくて，個性的，情熱的である。人工的，都会的なものを嫌って，自然なもの，素朴なものを愛する。因襲にたいして革命的である。……」(23) と考えておいて，一応正しいだろう。ブレイクの神秘思想，ワーズワースの自然愛，コールリッジの中世異国趣味，シェリーの人道主義，バイロンの革命的情熱，等々が何よりもそれを雄辯に物語っている。18世紀の末葉，スコットランドの農村に出現したバーンズが，その詩を書いたとき ― 地方的言語を挿入し，古代の詩型を再生し，おのずからなる感情を表白し，自然や妖怪を素材とし，権威を否定して弱きものへの愛情を歌ったとき，それは極めて自然な，しかも不可避的な Milieu によって取り巻かれていたことが分るのである。

L. Stephen は，「自然ということは，文学が，現に社会を形ずくりつつある最も活発な，有勢な思想の流を具現する社会階級によって，生み出されねばならないことを意味する。偉大な作家は，国民を背後に持たねばならない。そして，彼が真実に考え又感じることを，又同時代の人々が，最も深刻に考えることを表出せねばならない」(14) と書いている。バーンズの詩に打ち出されている技巧と主題の背後には，やはり，スコットランドがあり，イギリスがあり，そしてヨーロッパがある。いつまでも忘れられることのない，一つの時代の生ま生ましい記録がそこにある。

註(1) 'He enjoyed metrical and rhyming difficulties and set himself to overcome them.' Hilton Brown: "There was a Lad", Hamish Hamilton, London, 1949

(2) 'Later, there was practically no metre he did not or would not attempt.' ibid.

(3) '...those Excellent New Songs that are hawked about the country in baskets, or exposed in stalls in the streets.' T. F. Henderson: "Cambridge History of English Literature VI"

(4) 'a remarkable number for a book of rustic verse' ibid.

(5) 'Burns, in the end, gained five hundred pounds by his Edinburgh venture, as compared with twenty pounds for the six hundred copies of the Kilmarnock volume.' ibid.

(6) L. Stephen:「18世紀における英文学と社会」(岡本圭次郎訳) 研究社, 昭和31年

(7) 'Two conditions were precedent to his success. In the first place, his subject had to come from his heart and to force itself upon him. In the Second place, his subject had to be intimate and domestic.' Hilton Brown: "There Was a Lad"

(8) 'In a sense his poetical works are merely an expanded Auto-biographical Letter.' ibid.

(9) 'My passions, when lighted up, raged like so many devils, till they got vent in rhyme; and then the conning over my verses, like a spell, soothed all into quiet.' Letter to Moore, 2 Aug. 1787.

(10) 'Poetry comes from the heart and goes to the heart.' quoted from Peter Westland: "Romantic Revival", The English Universities Press, London, 1950

(11) 'All the spontaneous over-flow of powerful feelings.' "Lyrical Ballads" vol. 1, 1800

(12) 'Let Nature be your Teacher' Wordsworth: "Tables Turned"

(13) 'I love not Man the less, but Nature more.' Byron: "Child Harold's Pilgrimage, canto IV"

(14) 'He was in closer contact with humble life than was any of them. In the case of rustic theme, he is entirely in his element. Everywhere, there is complete comprehension and living reality.' T. F. Henderson: "Cambridge History of English Literature XI"

(15) 'On turning a mouse up in her nest with the plough.' subtitle of "To a Mouse"

(16) 斉藤勇 : 大和資雄編「詩人バーン」松柏社, 昭和36年

(17) 'Man is born free, and everywhere he is in chains.' Rousseau: "Contrat Social"

(18) I've noticed, on our laird's court-day,
An' Mony a time my heart's been wae,
Poor tenant bodies, scant o' cash,
How they maun thole a factor's snash;
He'll stamp and threaten, curse and swear,
He'll apprehend them, point ther gear:
While they maun stan', wi' aspect humble,
An' hear it a', an fear an' tremple!
from "The Twa Dogs"

(19) A. Toynbee :「英国産業革命史」(塚谷・永田訳) 邦光書房, 昭和33年

(20) G. M. Trevelyan :「英国社会史」(林健太郎訳) 山川出版社, 昭和25年

(21) 原一郎 :「英米文学史講座 6」研究社, 昭和36年

(22) 'Romanticism, French Revolution, Kant and Hegel, American Independence – all these things were but varying symptoms of a general ferment.' Peter Westland: "Romatic Revival"

(23) 斉藤勇 :「英文学史」研究社昭和14年

(24) L. Stephen :「18世紀における英文学と社会」